

研究開発成果 実装支援プログラム
平成23年度 報告書

実装活動の名称

「英虞湾の環境再生へ向けた住民参加型の干潟再生体制の構築」

採択年度	平成21年度
実装機関名	三重県水産研究所
実装責任者	国分 秀樹

1. 概要

- ・モデル実装地において、事前調査を含め、年に4回の割合で生物および底質の変化について調査を行った。海水導入前の事前調査の結果、底質は有機物含有量が高く非常に嫌気的狀態であった。そのため、生息する生物は非常に少なく、多様性の低いことがわかった。さらに海水導入後、事前調査では、ユスリカなどの富栄養化した場所に生育する生物が6種類、湿重量で7.2g/m²しかみつからなかったのに対し、干潟再生6ヶ月後には、小型魚類や、ウミナナやケフサイソガニのような移動性の生物を中心に20種類、再生干潟にみられるようになった。またアサリの稚貝も出現した。さらに18ヶ月後には、生物は30種、湿重量で770g/m²が出現した。徐々にではあるが確実に生物が増加していることが明らかになった。
- ・コアマモ移植と並行して、地元漁業者の方々に干潟再生効果を実感していただくために、再生干潟において、真珠に次ぐ地元の特産品であるアオノリの養殖試験をイベントにあわせて実施した。その結果、再生干潟において、アオノリの良好な生育が確認でき、良質なアオノリの収穫ができた。
- ・沿岸域の管理と事業担当行政部局である、三重県農水商工部をはじめ、志摩市、三重大学と共に連携研究会を実施し、実装事業の進捗状況の情報共有と干潟再生にかかる問題点の整理、事業化へ向けた検討を行った。その結果、沿岸の休耕地を干潟再生するための手続き等について、整理することができつつある。次年度意向も定期的実施する。
- ・地元協力機関（志摩自然学校、横山ビジターセンター、環境情報センター）と5、9、11月に干潟再生海域において生物観察会や指導者育成講座、アサリの放流、コアマモの移植、アオノリの養殖体験などの干潟再生活動を実施した。また次年度以降の連携体制について、計画調整を実施した。
- ・閉鎖性海域の環境保全と適正利用を目指し、全世界から研究者、市民、行政関係者、事業者等が幅広く参集し開催される国際会議、第9回世界閉鎖性海域環境保全会議（EMECS9）に招待され、実装支援事業で実施している「英虞湾の沿岸休耕地の干潟再生」について報告した。
- ・英虞湾再生協議会において事業概要の説明を行い、今後の活動の協力について承認された。
- ・マスコミやシンポジウム、学会など広く事業活動の成果をアピールした。
- ・志摩市役所との連携も進めており、志摩市の総合計画の後期基本計画の中で干潟再生について重点事業の一つとして明記され、「5年後に2カ所の干潟を再生する」という数値目標も示された。
- ・次の干潟再生候補地として、地元観光関係企業の所有する沿岸の遊休地を再生する予定で関係機関と調整を実施した。平成24年4月には再生を実施する予定。

2. 実装活動の具体的内容

【アサリの放流】

- 再生のシンボルとなるアサリの定着と増殖を目指し、約10mm程度のアサリ稚貝を購入し、モデル実装地に放流する。放流の際には、英虞湾再生協議会を中心に、地元住民および関係団体と連携し、イベントとして放流作業を行う。また、実装地内には再生評価用の放流も行う。
- 再生のシンボルとなるアサリの放流を、2011年11月にイベントとあわせて実施した。干潟再生と地元の主幹産業であるアオノリの養殖体験を、志摩市と志摩自然学校と三重大学の共催で地元ノリ養殖業者と協力して実施した。志摩市を中心とした一般県民の方々や市民の方々が総勢約20名参加していただいた(写真)。約100キロのアサリを放流した。また、ダイバーに海底の様子を動画に撮っていただき、参加者全員で確認した。放流後アサリの潜砂を確認した。作業の概要を図1に示した。



放流後のアサリの様子



アサリの放流の様子



アサリの浄化機能の説明

図1 作業の概要

【コアマモ育成】

- 次年度以降のコアマモ場造成のためのコアマモ種苗の増殖を水産研究所陸上水槽で行う。
- 鳥羽市浦村海域よりコアマモの生殖株を網袋(40cm四方)に10袋採取し、かけ流しの陸上水槽で約1ヶ月日光に当てながら追熟した後、脱落した種子を選別採取した。種子は約1ヶ月冷蔵保存した後、播種を行った。播種を行う陸上水槽には、トレー(60cm×40cm×15cm)を50個を設置し、天然海砂と英虞湾海底の泥を混合したものを入れ、ヤシ繊維マットを敷設した後、コアマモ種子を各トレーに30粒ずつ播種した。播種は平成23年1月に実施した。陸上水槽はサイフォンを用いて、1日に2回干満を繰り返すように調整し、水深をコアマモの適正生育水深に調整し、種苗の増殖を行った。結果、平成23年2月には種子が発芽したが、本年度は昨年度ほど良好な成長は確認できなかった。趣旨の追熟と水槽の汚れが原因として考えられた。作業の概要を図2に示した。



図2-1 コアマモ増殖用水槽



図2-2 マットを施設した増殖用トレイへの播種

【コアマモ場の造成】

●平成22年度に増殖育成したコアマモ種苗を用い、モデル実装海域において地元住民とともに移植を行う。

○陸上水槽において生育させたコアマモ種苗を地元住民とのイベントに合わせて、移植を行った。本年度はコアマモ種苗の生育が昨年ほど良好ではなかったため、移植は2011年5月のイベントで実施した。昨年度移植したコアマモ種苗は、DL0m以浅の浅い場所では、消失してしまったが、DL0m以深の深場で定着が確認できた。作業の概要を図3に示した。



図3-1 移植直後のコアマモ種苗



図3-2 昨年度移植したコアマモ

【生物調査】

●海水導入後の干潟再生効果を評価するため、5, 8, 11, 2月に海水導入後の生物量及び底質環境の変化の調査を行う。併せて、モデル実装海域以外の再生候補地について、調査を実施する。

○平成23年5, 8, 11, 2月にモデル実装海域において、海水導入後の生物量及び底質環境の変化の調査を実施した。調査地点の概要を図4に、調査の概要を図5に、再生干潟の底質及び生物の変化を図6に示した。

海水導入前では、ユスリカやカワゴカイ (*Hediste sp.*) などの汽水性で富栄養化した場所に生育する生物が6種類、湿重量で7.2g/m²しか生育していなかった。海水導入後、再生干潟は海域と同等の塩分 (29-32‰) に上昇し、徐々に汽水性から海水性の生物に変化した。海水導入6ヶ月後には、ボラやハゼやスズキの稚魚等の小型の魚類や、ホソウミニナ (*Batillaria cumingii*) やヘナタリ (*Cerithideopsis cingulata*)、ケフサイソガニ (*Hemigrapsus penicillatus*) のような移動性の生物を中心に20種類、湿重量で最大589g/m²見られるようになった。またアサリ (*Ruditapes philippinarum*) の稚貝も出現した。その後も生物は徐々に増加し、海水導入18ヶ月後には、約30種類、湿重量で約700g/m²の生物が確認できた。底質についても、海水導入区でAVS、CODともに明確な減少がみられた。これは、海水導入を行うことにより、再生干潟と海域との海水交換が促進され、徐々に底質が好気化していることを示す。それにより、潮受け堤防後背地に堆積している高濃度の有機物の分解が徐々に進行し、小型動物の生息に適した底質環境へ変化していることが推測された。以上より、今後継続して調査する必要があるが、海水導入により富栄養化した潮受け堤防後背地の生物生産性を向上できる可能性が示唆された。

また、5, 9月には、イベントに合わせて、地元住民とともに調査を実施した。



図4 再生干潟と調査地点の概要



図5-1 底質調査の概要



図5-2 生物調査の概要



図5-3 採取された生物



図5-4 住民との生物調査

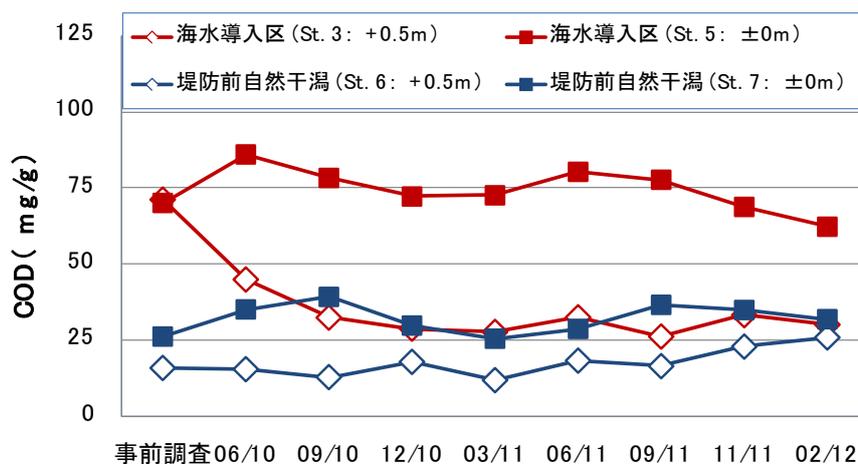


図6-1 海水導入（干潟再生）後の底質環境（COD）の変化

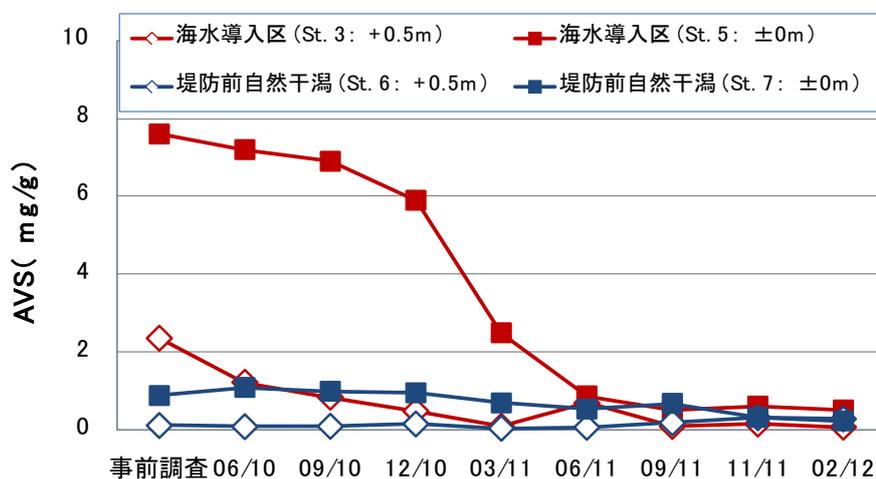


図6-2 海水導入（干潟再生）後の底質環境（AVS）の変化

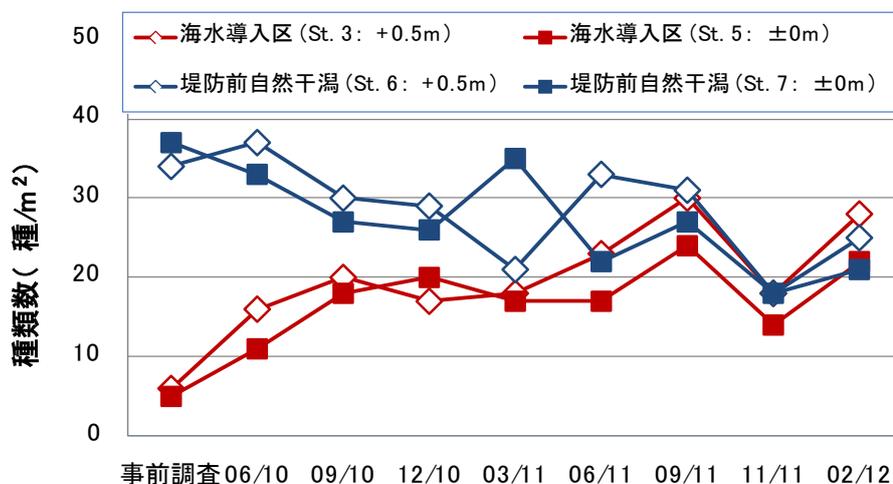


図6-3 海水導入（干潟再生）後の小型動物の種類数の変化

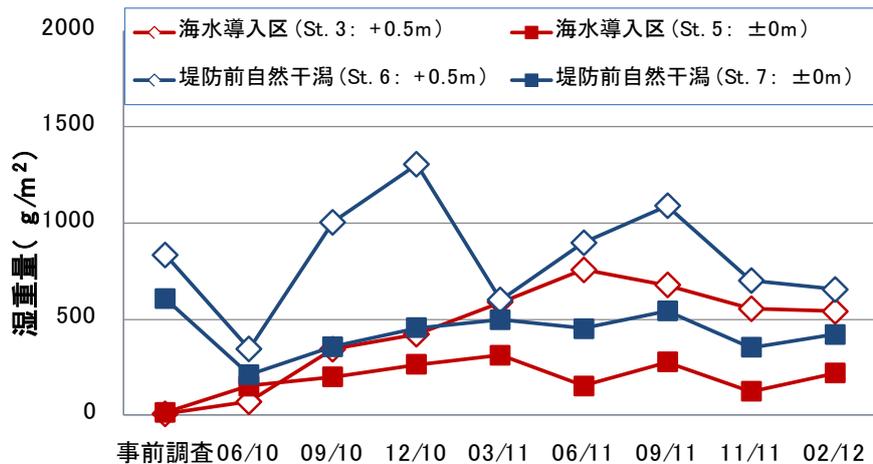


図6-4 海水導入（干潟再生）後の小型動物の湿重量の変化

【環境学習会と再生協議会連携イベント】

●モデル実装地において、引き続き、平成22年度と同様に、干潟再生イベントを実施する。イベントの際には、地元住民によるアサリ放流、コアマモ移植および環境学習会を実施する。事業終了後の活動基盤の継続を意識し、英虞湾自然再生協議会をはじめとする地元協力機関に主体的に活動をしていただけるようなイベントを実施する。

○2011年5, 9, 11月に地元住民を対象に伊勢志摩国立公園横山ビジターセンターと志摩自然学校、志摩市、三重大学、地元漁業者と連携して干潟再生の体験イベントを実施した。これらのイベントは、事業終了後の自律的な再生活動の継続基盤の構築と、地元住民への干潟再生効果の普及啓発を目的として開催した。今後再生活動の主体を、上記の機関に移行していきたいと考えている。具体的には、干潟再生の主体は「志摩市」へ、再生干潟を利用した活動については「伊勢志摩国立公園横山ビジターセンター」を考えている。参加者の中には複数回参加していただいている方も見られた。

今年度はコアマモの状態も良くなかったため、並行して、地元漁業者の方々に干潟再生効果を実感していただくために、再生干潟において、真珠に次ぐ地元の特産品であるアオノリの養殖試験をイベントにあわせて実施した。その結果、再生干潟において、アオノリの良好な生育が確認でき、良質なアオノリの収穫ができた。イベントの概要は下記のとおり。

- ◆5/21 干潟観察会 横山ビジターセンター
(対象:志摩市民25名)
- ◆9/10 干潟観察会 横山ビジターセンター, 志摩市
(対象 志摩市民 20名)
- ◆11/12 干潟再生体験 志摩自然学校, 三重大学, 志摩市, 地元漁業者
(対象:一般市民20名)



図7-1 生物の同定分類



図7-2 砕波帯ネットによる生物の採集



図7-3 地元漁業者によるアオノリ養殖の説明



図7-4 アオノリ養殖体験



図7-4 再生干潟から採取できたアオノリ



図7-5 配布したアオノリ

【指導者育成講座】

- 環境に興味のある地元住民を対照に、今後干潟再生活動(生物調査やコアモモ場再生)に関する指導者を育成するための取り組みを行う。
- 2011年6月に「志摩市」と協力して、干潟再生に関心のある地元住民の方々を対象に、「干潟生き物調査隊」を実施した。このイベントでは、日本国際湿地保全連合が提唱する調査手法についての研修と英虞湾における干潟再生の意義についての講習を行い、より熱心な地元

住民の方々に今後の再生活動を担っていただくための、研修を実施した。この中から、再生干潟を利用して観察会等の指導者を育成する。また、実装支援事業終了後を考慮し、「横山ビジターセンター」に今後の再生イベントを継続していただくように調整を行った。2011年5月と9月の干潟再生イベントにあわせて、「横山ビジターセンター」のレンジャーの方とともに引き継ぎを兼ねて、観察会などを実施した。

- ◆5/21 干潟観察会 横山ビジターセンター
(対象:志摩市民25名)
- ◆6/4 「英虞湾干潟生き物調査隊」 志摩市
(対象:志摩市民30名)
- ◆9/10 干潟観察会 横山ビジターセンター, 志摩市
(対象 志摩市民 20名)



図8-1 研修の様子



図8-2 研修の様子

【地元への報告会】

- 実装支援中に得られた成果については、定期的開催される英虞湾自然再生協議会および年次報告会を開いて報告し、さらには事業担当行政部局とも情報共有する。
- 志摩市が取り組んでいる「里海創生事業」の中で「志摩市里海創生基本計画策定委員会」にも委員として参加し、志摩市里海創生基本計画の中にも「干潟再生」を明記していただいた。さらに志摩市の方からも定期的に、地域の自治会や、観光協会、商工会やNPO等に「里海事業」の説明をする際には、干潟再生についても説明していただき、市民への普及を図っている。また、干潟再生の活動は、地元ケーブルテレビや海洋政策財団のブログにも取り上げられ、定期的に動画として発信していただいている。水産研究所でも、県民を対象に成果報告会を実施し、事業の普及啓発を行った。



図9-1 志摩市里海創生基本計画策定委員会の概要



図9-2 水産研究所成果報告会の概要

【事業化検討研究会】

●事業担当行政部局である、三重県農水商工部をはじめ、志摩市、三重大学と共に連携研究会を実施し、実装事業の進捗状況の情報共有と問題点の整理、事業化へ向けた検討を定期的に進める。この研究会の中では、他の沿岸休耕地の再生に向けた取り組みも進めていく。まず、英虞湾内の他の再生候補地の抽出検討を実施する。また選定した再生候補地について再生へ向けた課題の抽出と問題点の整理、事業化へ向けた検討を定期的に進める。

○2011年5月と2012年1月に、三重県農水商工部をはじめ、志摩市、三重大学と共に連携研究会を開催し、実装事業の進捗状況の情報共有と問題点の整理、事業化へ向けた検討を実施した。堤防の管理を行っている農業基盤部局にも実装支援事業の成果を説明し、これまでの世間の注目度を考慮していただきくことにより、沿岸の休耕地活用についての理解を得られつつある。大きな成果としては、今後干潟再生を他の場所で実施する場合の手続きについて、関係部局とともに整理することができた。また、干潟再生後の漁業などへの利活用についても、今後関係部局とともに検討する予定である。さらに、伊勢志摩地域の関係部局間で理解が得られつつある。これらの手続きやノウハウについては、実装支援事業の終了までにマニュアル化し、今後事業担当部局で利用可能なものに仕上げていく予定である。

あわせて、現在地元企業が所有する、第二の干潟再生についても調整中である。次年度以降は、その干潟再生についても協力して進めていくことになった。

【PR活動（他海域への展開）】

●イベントの際にはマスコミを通じて広報する。また、事業のHP等の作成も行う。学会やシンポジウムなどへの報告を積極的に実施し、同様の問題を抱えた海域へのアピールを行う。

○本年度も昨年度と引き続き、広く国内外へ向けてPR活動を実施した。特に本年度は、アメリカチェサピーク湾のボルチモアで開催された、第9回世界閉鎖性海域環境管理に関する国際会議に招待され、講演を行った。その結果、多様な主体が連携し、適切に人の手を加えることで生物生産性を高め、「豊かな里海」を取り戻す日本でも数少ない重要な手法であるとして、会議の中で取り上げられ、高く評価されました。また、水産研究所の取り組みは、地域の住民や自治体との連携、行政の横の連携をによるものであり、さらには地元志摩市の総合計画に取り上げられるなど、政策展開にもつながっていることから、参考としたいとの声が多く寄せられた。

また下記に示すように、新聞やテレビ、シンポジウムや講演会など、多数の場所から注目され、広く事業活動をアピールできた。さらに、同様な問題を抱える他海域の担当者など、国内外から多くの視察もあった。これまでの活動の成果が少しずつではあるが、広がってきた結果であると考えられる。

事業紹介用のパンフレット(日英版)やHPに進捗状況などをアピールした。



図10-1 EMECS9での講演



図10-2 志摩市担当者の講演



図10-3 国土交通省視察の様子



図10-4 JICAの視察

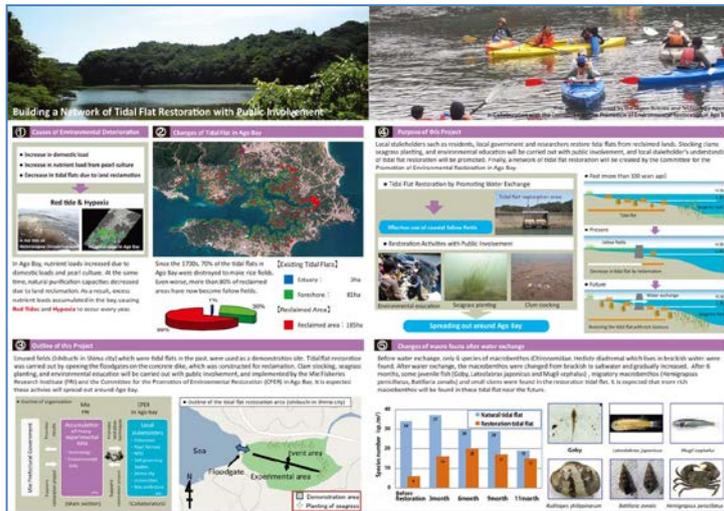


図10-5 事業紹介用のパンフレット(日英版)



図10-6 水産研究所の事業HP

【再生効果の予測と再生技術のモデル化】

- 湾内および他海域への展開を目指し、再生効果の予測や防災面からみた水門の適正開放率についてモデル化を行う。
- 本年度、石淵再生干潟をモデルにした数値流動モデルを開発し、それを用いて、再生効果の予測と再生技術のモデル化を現在検討中である。今後調査データを解析し、連携することによって、進めていく。

3. 理解普及のための活動とその成果

(1) 展示会への出展等

年月日	名称	場所	概要	ステークホルダー	社会的インパクト
11.11.02	産官学交流フォーラム	四日市ドーム	県内研究機関の研究成果を紹介する	県民	8000人

(2) 研修会、講習会、観察会、懇談会、シンポジウム等

年月日	名称	場所	概要	ステークホルダー	社会的インパクト
11.05.13	内閣官房統合的沿岸管理に関する先進事例視察	実装海域	海洋基本法を所管する内閣官房より、統合的沿岸管理を実践する先進事例として、視察にこられた。	内閣官房職員	3名
11.05.18	的矢中学校への出前授業	的矢中学校	志摩市内の中学校へ、実装支援事業の取組について授業を実施した。	志摩市内中学生	25名
11.05.21	石淵干潟観察会	実装海域	伊勢志摩国立公園横山ビジターセンターと共催で、実装海域において、干潟再生体験と生物観察会を実施した。	志摩市民	25名
11.05.26	海づくり会議みえ研修会	四日市市環境学習センター	伊勢湾沿岸域で活動するNPOの代表者の方々の研修会	県内NPO代表者	50名
11.07.01	中部地方整備局視察	実装海域	中部地方整備局より、英虞湾の干潟再生事業の事例を今後の事業の参考にしたいとの依頼があり、現場で事業概要の説明を実施した。	中部地方整備局職員	10名
11.06.16	地方環境研究機関と国立環境研究所との研究連	横浜市健環境研究所	国立環境研究所と環境研究機関との研究会「浅海域の干潟・藻場における生態	国立環境研究所及び地方自	20名

実装支援プログラム 年度報告書 様式

	絡会議		系機能に関する研究会」において、実装支援事業で取り組んでいる英虞湾の干潟再生の概要を説明した。	治体職員	
11.07.29	東京大学からの視察	実装海域	東京大学より、沿岸域の法律と環境学習、環境再生の専門の研究者が、石淵実装海域の取組について調査したいとの連絡があり、対応した。	東京大学の研究者	10名
11.09.06	全国知事会	東京	全国知事会に三重県における沿岸域再生について報告された。	全国自治体知事	50名
11.09.28	平成23年度 第5回技術セミナー (社)三重県測量設計業協会会議	三重県総合文化会館	(社)三重県測量設計業協会が主催する平成23年度第5回技術セミナーへ招待され、講演を実施した。	三重県測量士協会会員	200名
11.09.28	三重大学社会調査演習2011	実装海域および志摩市役所	三重大学生物資源学部より、干潟再生にかかる沿岸域の法的な課題と、周辺住民への理解の向上について、学生実習を実施したいとの依頼があり対応した。	三重大学生物資源学部学生	50名
11.07.31	四日市大学サマースクール	高松干潟および公民館	四日市大学より、サマースクールにおける干潟生物研修と事業説明の講師依頼があり、干潟生物の同定研修と事業の説明を実施した。	四日市大学生及び県内の高校生	20名
11.11.09	JAICA干潟再生事例に関する研修	実装海域	JICAより日本における自然再生事業の先進事例視察の依頼があり、英虞湾における干潟再生活動の概要について説明した。	中東の省庁関係者	15名
11.09.10	石淵干潟観察会	実装海域	伊勢志摩国立公園横山ビジターセンターと志摩市の共催で、実装海域において、干潟再生体験と生物観察会を実施した。	志摩市民	30名
11.11.12	石淵干潟再生体験	実装海域	志摩自然学校と志摩市、三重大学が共催で、実装海域において、干潟再生体験とア	志摩市民	30名

実装支援プログラム 年度報告書 様式

			サリの放流およびアオノリ養殖体験活動を実施した。		
11.11.15	海洋政策財団統合的沿岸域管理に関する研修	実装海域	海洋政策財団が推進している統合的沿岸管理（ICM）の研修会として海洋政策財団から研究員が視察にきた	海洋政策財団研究員	10名
11.12.01	九州大学柳教授視察	実装海域	里海の提唱者である九州大学柳教授が、来訪し、干潟再生の実情について視察を実施した。	九州大学柳教授	1名
11.12.18	みえ水産フォーラム	三重県総合文化会館	三重県水産研究所と増養殖研究所、三重大学が共催する、フォーラムにおいて、事業成果の報告を行った	県民及び県内行政職員	100名
12.01.16	海の再生全国会議	パシフィコ横浜	平成23年度第6回海の再生全国会議より、中部エリアの代表として実装事業の成果内容を報告して欲しいとの依頼があり、事業成果について報告した	全国の海域行政関係者及び研究者、NPO関係者	450名
12.01.28	徳島大学の視察	実装海域	徳島大学の上月教授をリーダーとする沿岸域再生会議のメンバーが来訪し、事業成果について、意見交換を実施した。	徳島大学関係者	15名
12.02.09	地方環境研究機関と国立環境研究所との研究連絡会議	神奈川県保健環境研究所	国立環境研究所と環境研究機関との研究会「浅海域の干潟・藻場における生態系機能に関する研究会」において、実装支援事業で取り組んでいる英虞湾の干潟再生の概要を説明した。	国立環境研究所及び地方自治体職員	20名
12.02.15	伊勢管内行政連絡会議	伊勢県民センター	伊勢管内の農林水産商工環境関係部局の室長会議において、事業性かを報告し、今後の各部局の協力体制について情報共有を実施した。	伊勢志摩管内農林水産商工環境部局室長	10名

12.02.20	水産研究所成果 報告会	松阪ノリセンタ ー	水産研究所が県内の漁業 者及び行政関係者対照に 行う成果報告会において、 事業成果を報告した	漁業者及 び行政関 係者	50名
12.03.12	平成23年度伊勢 湾総合対策協議 会環境問題研究 会（水質部会）	四日市港管理組 合	伊勢湾周辺自治体の環境 関係職員が集まる会議に おいて、事業の成果を報 告した	伊勢湾 周辺自 治体職 員	50名

(3) 新聞報道、TV放映、ラジオ報道、雑誌掲載等

①新聞報道

- ◆ 05/13 伊勢新聞「21日に干潟生物の観察会」
- ◆ 05/24 中日新聞「再生目指す干潟、貝やカニがよみがえる」
- ◆ 06/04 中日新聞「アマモで海を浄化しよう」
- ◆ 08/13 伊勢新聞「干潟再生取組の成果を海外へ披露」
- ◆ 08/26 読売新聞「英虞湾再生取組評価」
- ◆ 08/28 中日新聞「英虞湾 甦る干潟」
- ◆ 10/17 読売新聞「新しい里海づくり」
- ◆ 11/13 毎日新聞「干潟再生に願いを込め、アサリ放流とノリの養殖」
- ◆ 11/13 中日新聞「志摩で干潟再生活動 小学生らアサリ放流」
- ◆ 12/29 毎日新聞「アオサ順調に成長 漁協が最優秀判定」

②TV放映

- ◆ 05/21 松坂ケーブルテレビ「ニュース 干潟観察会」
- ◆ 06/08 松坂ケーブルテレビ「ニュース 英虞湾生き物調査隊」
- ◆ 09/07 松坂ケーブルテレビ「国際会議で干潟再生取組報告」
- ◆ 11/12 松坂ケーブルテレビ「アサリ放流とアオノリ養殖体験」
- ◆ 11/12 三重テレビ「ニュース アサリ放流とアオノリ養殖体験」
- ◆ 12/16 三重テレビ「輝け三重人 水産研究所で実施する干潟再生」
- ◆ 11/12 三重テレビ「ニュース アサリ放流とアオノリ養殖体験」

③ラジオ報道

- ◆ 11/11 FM三重「干潟再生イベント開催」

④雑誌掲載

- ◆ 04/21 CBD Technical Series No. 61 「Towards Satoumi in AGO Bay」
- ◆ 09/07 水産研究所たより「住民参加型の干潟再生」
- ◆ 09/26 自然保護協会「英虞湾沿岸の休耕地を干潟に」

(4) 論文発表（国内誌1件、国際誌1件）

- 国分秀樹，山田浩且：英虞湾における沿岸休耕地の干潟再生，土木学会論文集B2（海岸工学），Vol. 67（2011），No. 2 pp. I_956-I_960
- Hideki Kokubu, Hirokatsu Yamada, Evaluation of Tidal Flat Restoration Effect in the Coastal Unused Reclaimed Area by Promoting Tidal Exchange in Ago Bay, Estuarine, Coastal and Shelf Science,（投稿中）

(5) WEBサイトによる情報公開

- 水産研究所
（http://www.mpstpc.pref.mie.lg.jp/SUI/jissousien/jisso_kai.htm）
- 志摩市里海ブログ
（<http://www.city.shima.mie.jp/blog/>）
- 海を活かしたまちづくりー沿岸域の総合的管理を目指してー
（<http://blog.canpan.info/oprficm/>）

(6) 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

- ① 招待講演（国内会議 2 件、国際会議 1 件）
 - ◆ 08/28 Environmental Management for Enclosed Coastal Seas
～31 第9回世界閉鎖性海域環境保全会議（EMECS9）
 - ◆ 09/28 平成23年度 第5回技術セミナー
 - ◆ 01/16 海の再生全国会議
- ② 口頭講演（国内会議 6 件、国際会議 1 件）
 - ◆ 11/18 海岸工学会
 - ◆ 10/19 応用生態系工学会
 - ◆ 12/18 みえ水産フォーラム
 - ◆ 01/16 海の再生全国会議
 - ◆ 02/20 水産研究所成果報告会
 - ◆ 03/12 平成23年度伊勢湾総合対策協議会環境問題研究会（水質部会）

(7) 特許出願

特になし

(8) その他特記事項

- ◆事業全体の進捗状況と今後の予定について
事業計画は概ね計画通りに遂行できた。本年度は国際会議から招待を受け、事業成果について報告させていただいた。また昨年度に引き続き、他海域からの視察や講演などの依頼も多くあった。少しずつであるが、事業についての注目が広がっていると考えている。、メディア等に多く取り上げられ、非常に事業のPRになった。さらにメディア等で取り上げられたことが発端として、志摩市以外の自治体や国の省庁等からの視察や講演依頼が非常に多かった。これは、沿岸休耕地というこれまで手をつけられ

ていなかった場所について、着目して取り組んだ本事業の新規性と、統合的沿岸管理にもつながる、本来の縦割り行政の枠を超えた横断的な取り組みが注目された結果であると考えられる。この取り組みは、水産庁や環境省、国交省をはじめ、伊勢湾再生推進会議など、国内の同様な問題を有する海域への有効な先進事例になる可能性を有している。

また、地元である志摩市では、市長をはじめ本事業の干潟再生に理解をいただいております。来年度以降の志摩市の総合計画の重点課題に「5年後に5カ所の干潟を再生する」と明記していただくことになった。さらに本年度は地元の基本計画策定委員会にも委員として参画し、志摩市の重点事業として、位置づけられた。少しずつであるが、地元への定着が進みつつある。それにあわせて、堤防を管理する農業部局や水産部局とともに実施している「干潟再生研究会」において、石淵以外のさらなる干潟再生に向けて候補地を選定し、その候補地を再生するにあたっての課題整理を研究会の中で実施した。その結果、今後干潟再生を実施するための、手続き等について関係行政部局と一連の合意が形成できた。今後はその手法をマニュアル化し、今後事業終了以降にも継続して使用可能なものを作成していく予定である。

さらに、サポーターとしての地元の理解を増進するため、引き続き干潟再生体験等のイベントを継続する。事業終了後の体制の構築に向けて、地元の横山ビジターセンターや志摩自然学校に再生活動の基盤を担っていただけるように徐々にイベントの主体も移行していく。

また、第二の干潟再生も実施の調整を実施している。場所は地元観光企業「合歓の郷」が所有の沿岸遊休地である。この遊休地を再生することで、地元企業のCSRや志摩市の里海再生にもつながり、関係者の利害関係が一致する。この活動を事業期間内に完遂させる予定である。

以上の取組をまとめて事業終了後には、地元志摩市の中で、再生活動を実施していただけるように調整を図っていく予定である。

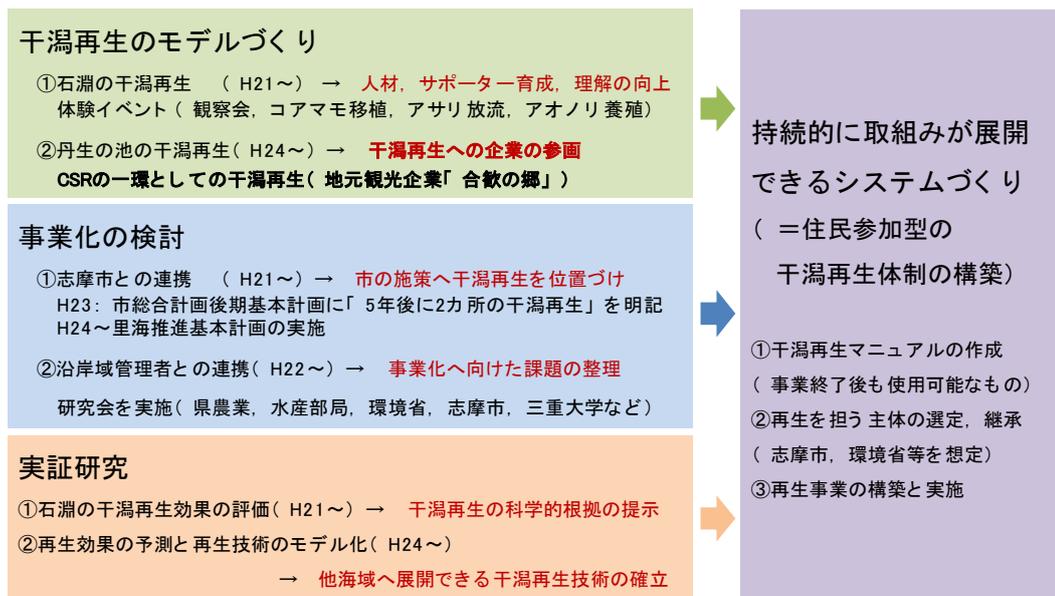


図 事業水深イメージ